



函館市港町の北海道大学函館キャンパスでは、魚や海を研究しています。ここにある、博物館「水産科学館」と図書館をいっしょにした「水産科学未来人材育成館」は、大学の先生や学生だけでなく、だれでも利用できる施設です。こども記者2人が大学を訪れ、海の生き物の標本や古い資料などを取材しました。(玉川生)

自ら考え調べる 海の博物館



①展示室でトドの剥製を見上げる(左から)太田大聖さん、中村朱里さんと北大の田城さん(いずれも金田淳さつえい)
②三隅さん(右)の案内で図書館の書庫へ。古い本がたくさんありました

北大の「水産科学未来人材育成館」

こども記者は、函館市・八幡小4年の太田大聖さんと渡島管内八雲町・八雲小6年の中村朱里さん。魚を研究している水産科学館の助教の田城文人さん(42)と、図書を担当する職員三隅健一さん(44)が案内してくれました。最初に最上階の3階の展示室へ。中にはトドやラッコ、ゼニガタアザラシなど、今にも動き出しそうな海の動物の剥製がずらりと並んでいました。ケースに入れていないのは「細かい部分まで見てほしいから」と田城さん。「この特徴は、解説を書いていないところ。大学の博物館なので勉強する場所でもあり、自分たちで考えてほしいからです」と展示への思いを聞きました。太田さんは「剥製は、くさらないんですか」と質問。田城さんは「作った時代が変わりますが、毛皮の中はわらや粘土、鉄骨などが入っていますか」と質問。田城さんは「作

江戸時代の資料も所蔵



事務室のパソコンにキーワードを入れると、資料がある箱の場所を発見。1955年に使った「海流調査用海流封筒」を通じ、北海道の日本海側に海洋ごみが流れ着きやすいと分かりました。次は2階の図書館。三隅さんによると、建物が新しくなって地震対策が進み、震度4以上で本が落ちないよう棚のバーが上がり、震度5程度以上だと書庫の移動式本棚が

るので、くさりません」と答えました。

2024年に建物ができ、昔の博物館から資料を移す際、研究に使った資料などの写真をとってデータベースにまとめました。そこで「海のごみ問題について、どんな調査をしているのか聞きたい」という中村さんの質問の答えを調べました。

事務室のパソコンにキーワードを入れると、資料がある箱の場所を発見。1955年に使った「海流調査用海流封筒」を通じ、北海道の日本海側に海洋ごみが流れ着きやすいと分かりました。次は2階の図書館。三隅さんによると、建物が新しくなって地震対策が進み、震度4以上で本が落ちないよう棚のバーが上がり、震度5程度以上だと書庫の移動式本棚が

勝手に動かないようフレイキがかかっているそうです。

北大は前身の札幌農学校の開学から今年で150周年です。水産学部も1907年(明治40年)の札幌農学校水産学科設置から来年で120年と長い歴史があります。

それだけに古い蔵書も多く、図書館の奥には1708年(江戸時代中期)のラテン語の資料や、1870年代(明治初期)に日本をめぐり世界各地で海洋調査をした英国

のチャレンジャー号の報告書も。2人も古さにおどろいていました。最後は1階にある研究室「ウエットラボ」へ。田城さんに教えてもらいながら、目の前のカレイが何の種類か、図鑑を使い調べました。目が体のどちら側にあるか、いぼ状の突起があるか。特徴からしぼりましたが、ひれにある骨の数を調べないと分かりません。



エックス線装置を動かすと、カレイの体内に残っていたつり針を発見

そこでエックス線装置にカレイを置くのと体がすけ、2人は「骨が見える!」と声を上げました。体内に、つり針も残っていました。2人は機械を操作し、拡大したり見える範囲を移動させたりして骨の数を数え、インカレイだと分かりました。標本の作製や維持管理もする田城さん。「標本を作るとき一番大切にしていることは」という太田さんの質問に、「標本は生き物の命をうばうこと。100年先も世界中の人が使えるよう残したい」と真剣な表情で答えました。取材を終え、中村さんは「標本がどうやって作られたのか知ることができ、楽しかった」と話していました。

水産科学館は火と土曜(祝日、お盆、年末年始除く)の午前10時〜午後4時。図書館は調査研究目的に限り、平日午前9時〜午後8時(大学休業期は同5時まで)、土日午後1〜8時(大学休業期は休館)、祝日は大学試験期のみ午後1〜8時。いずれも事前予約不要で利用無料。1階の北大生協水産店(平日午前10時〜午後3時。大学休業期等は短縮営業)では日用品など大学グッズも買えます。